

## 新資料紹介

## 「ほんものが生きてゆけない世間」への憂い

石川 巧

池袋雑筆

江戸川乱歩

池袋は変った。という噂はある。

変ったのは西口方面の要町え向つた道路に、ともかくがらくた商店街が現出しただけだ。ほんとうに池袋を知っている者にはありがた迷惑な話である。まさか池袋が東京のゴミ捨て場になるとは誰しも予想しなかつたにちがいない。池袋に来る人には、銀座にもあきた連中ばかりなら興も湧くであろうに——。みんな酔ひどれ天使を気取る兄ちゃんや姐ちゃんである。良家の主婦や家族連れを池袋で見る、おきのどくながら「馬鹿正直」という言葉が口え上るのだ。良識は敗戦後の世相ではほこりだらけの仏像的役割しかなないので

あろうか？ こと私事だが、私の関係する小説界でも主材とか、トリックとか、いろいろ珍奇な道具立てが顔を売りはじめている。それが立派に真実を表現する道具立てならまだしも、通り相場でもある。「喰うことも真実だ」という奇妙なロジックを用意した地方廻り小説なのだからたまらない。

ほんとのものが生きてゆけない世間を私たちは憎む。しかしいてもそれだけではどうにもならないのだ。いつたいそれならどうしたらよいのか？ こんな間を愚劣と笑う余裕がないかぎり、日本文学にノーベル賞を考えるのは時期尚早なのかもしれない。

(一九四八・一一・一〇記)

## 【解説】

江戸川乱歩「池袋雑筆」は、随筆雑誌『三十日』第二巻第一号（一九四九年一月十日）に掲載された短文の随筆である。誌面全体を一月のカレンダーに見立て、毎日、ひとりの書き手が随筆、詩、挿絵などを執筆するというユニークな編成方針を取るこの雑誌は、戦時中の一九三八年に野田書房が発行した随筆雑誌『三十日』の誌名と体裁を継承したものと思われる。

現在、メリーランド大学のプランゲ文庫に第一巻第一号と第二巻第一号が収蔵されているほか、日本近代文学館には第一巻第一号、第二号、第二巻第一号があり、現状で三冊の発行が確認できる。江戸川乱歩に関する最も詳細な執筆年譜である中相作の「名張人外鏡」(<http://www.e-net.or.jp/user/stako/EDJ/E02seth.html> 閲覧日二〇二二年十二月十七日)の「執筆年譜」には「池袋雑記」の記載もあるが、同執筆年譜では「偽作」という注記が付されている。中相作がどのような根拠に基づいてそのように表記したのかは不詳だが、『三十日』という雑誌の信頼性および「池袋雑筆」の内容から類推する限り、この随筆を「偽作」とする理由は見出せない。



【図1】随筆雑誌『三十日』

また、この随筆の特徴のひとつは、自宅のあった池袋の街並みが「がらくた」の氾濫する敗戦後の世相に吞み込まれていく様子を皮肉めいた言葉で綴るとともに、それを文学の問題に敷衍し、「ほんものが生きてゆけない」状況を憂えていることである。

「池袋雑筆」を掲載した『三十日』の奥付には、『三十日』第二巻第一号／毎月一回一日発行 昭和二十四年一月五日印刷納本 昭和二十四年一月十日発行 定価五十円 編集人 菊池久吾 発行人 西川喜万 印刷所 東京都千代田区西神田二の七 芳文社 発行所 東京都中央区木挽町一ノ九「三十日」編輯部 発売所 東京都中央区呉服橋二の三の八 大衆社」とある。『三十日』（一九四九年一月）には江戸川乱歩の他にも著名人が名を連ねており、大木實、下村海南、三雲祥之助、飛田積洲、佐藤垢石、加藤将之、和辻春樹、伊福部隆彦、岡崎源一郎、宮地

嘉六、村上多恵子、大原富枝、陶山務などが寄稿している。表紙画は棟方志功が担当している（【図1】参照、原本は筆者所蔵）。

エッセイの冒頭、乱歩は敗戦直後の池袋を「東京のゴミ捨て場」と呼んでいる。ヤミ市を舞台とする映画「酔ひどれ天使」に喩えていることから明らかのように、「ここでいう「がらくた商店街」というのは、バラック建ての長屋やゴザ敷の露天商が集うヤミ市である。

敗戦後の混乱した社会状況のもとでは食糧や生活物資の配給を十分に受けることができず、人々は飢餓と困窮に喘いでいた。そうしたなか、ターミナル駅周辺の疎開地や戦災焼失地にヤミ市と呼ばれる自由マーケットが誕生す



【図2】1953年のグラント・ハイツ住宅地区

る。なかでも、池袋のヤミ市は新宿、渋谷、上野、有楽町などと並ぶ大規模なものであり、乱歩が居住していた西口に限ってみても、豊島師範学校跡地（現在の東京芸術劇場周辺）を中心に広く分布していた。

また、池袋の場合は赤羽線・武蔵野鉄道（現在の西武池袋線）と東武東上線が農村部と繁華街を結んでおり、野菜や穀物などの食糧を供給するのに便利な土地だった。一九四六年春以降は警察の取り締まりが厳しくなり、一九五〇年前後にかけては露天整理令に基づく戦災復興土地区画整理事業も進められるが、池袋西口のマーケットが最終的に姿を消すのは東京オリンピックを間近に控えた一九六二年だった。

だが、エッセイのなかで乱歩は池袋駅周辺とはいわず「西口方面の要町え向つた道路」と表現している。現在、池袋谷原線となっているこの道路を西へ向かったさきにあるもの。それは、光が丘の米軍グラント・ハイツである。一九四七年三月、連合軍に接收された成増陸軍飛行場跡地に米軍家族宿舍の建設が始まったグラント・ハイツは、一九四八年六月に完成し「グラント・ハイツ住宅地区」となる（【図2】は一九五三年の同地区。出典は資料検索

サイト「練馬わがまち資料館」閲覧日二〇二二年十二月十七日）。また、近隣に巨大な家族宿舍ができたことで、池袋には米軍の払い下げ物資が大量に集まるようになる。

こうして、「西口方面の要町え向つた道路」は米軍の払い下げ物資を買い求めようとする人々で溢れる。乱歩が苦々しい思いで眺めていた光景は、まさにそれである。「池袋雑筆」の背後には、敗戦国の民衆が戦勝国の「がらくた」に群がり、必死になって手に入れようとするこへの憤怒が滞留しているのである。

当時の池袋西口には九一三二平方メートルもの戦災復興マーケットが広がり、五一〇コマの区画に三二五の営業店舗と一八二の住宅が密集していた（立教大学社会福祉研究室「池袋戦災復興マーケット実態調査」『HUMAN RELATIONS』No.21 一九五〇年三月）というから、乱歩がそれを見かけていないはずはないが、彼が西口のヤミ市ではなく「西口方面の要町え向つた道路」に限定した理由は、きっとそこに敗戦国の惨めさが集約されていたからであろう。

また、ここで乱歩が「西口方面の要町え向つた道路」の様子を具体的に描写しないのは理由がある。「池袋雑

筆」が発表された一九四九年一月は、プレスコードにより新聞、雑誌、放送の言論や表現が厳しく統制されていた時期である。削除および発行禁止対象のカテゴリーには「占領軍軍隊に対する批判」や「GHQまたは地方軍政部に対する不適切な言及」はもちろん「闇市の状況」も含まれていた。戦時中、大政翼賛会豊島区支部事務長に就いていたという理由で戦争協力者の調査対象となっていた乱歩にしてみれば、余計なことを書いてバッシングを受けたくないという思いもあったはずである。彼はそうした熟慮のもと、敢えて間接的な表現で戦後池袋の世相を伝えているのである。

エッセイの後半、乱歩は敗戦後の混乱のなかで「良識」が意味をなさなくなっている状況を憂い、「喰うことも真実だ」と開き直る「地方廻り小説」を唾棄するが、そこに添えられる「ほんとのものが生きてゆけない世間を私たちは憎む」という一節は、売ればよいという低俗な「がらくた」文学ばかりが隆盛する世相に向けた苛立ちであると同時に、目の前にある事実をありのままに語ることすら許されない状況に対する必死の抵抗でもあったのではないだろうか。（本学文学部教授）